に殊更ら指先を清潔にするだらふし其の局部にあてる布の如きも消毒ガーゼを用ひ又た假りにも汚水を侵入せしめざるやうといつたやうな注意を拂ふに相違はないと思ふ、處が其の臍と極めて近しい部分に用ひる襁褓は何うであるか恐らくそこまで深い考へを持つ人は多くあるまい。

いや、考へくらゐは持つておるかも知れぬ、しかし襁褓は小供の尿屎を取る爲めに用ひるものであるからといふことで多くは古布やボロぎれを用ひるのが昔からの習慣となつておるから夫れに切り立ての新らしい布を用ひる人は滅多にあるまい、又た假りに古布やボロぎれを用ひた處で完全に消毒の出來たものなれば差支へは無いが、素人細工の消毒は完全といふことが出來かねる、然も若しさうした古布の襁褓に萬一有毒細菌が附着をしてあつたとしたに抱はらずそれを股間から腹部にかけて纏ふとしたならば頗る危險極まる次第だと云はねばなるまい。





といふて古布やボロぎれを襁褓とすることを絶對に惡いと云ふのでは無いが若し夫れを用ひるとするならば完全に消毒をせねばならぬ、しかし完全な消毒については夫れ相當の設備を要することになるから素人の消毒法としては其の用ひんとする布を釜にでも容れて充分に煮沸することが比較的容易でもあり且つ完全であると云ひ得る、それで無くして單に日光消毒の如きは決して安心は出來得まいと思ふ。

## ◇……衣服と寢さし方

体温の高い母胎から外界に出た生兒の爲めにはある程度まで温まりを與ねばならぬ、此の點に於いて夫れに着せる衣服の如きも普通より稍々厚着とする要はあるが、しかし夫れも時候に應ずべきは勿論のことであると共に、暖めんが爲めに無暗に厚着をせしめることは發育上に弊害を來すことになる、又た母

胎の體温も分娩してから後いつ〳〵までも感じておる譯では無いのであるから自然に外界の温度に馴れしめるやう、そして厚着から次第に薄着に馴れしめるやう心がけるが宜しい、又たそれと共に紐の如きも成るべく細いものを避け、強く締めないでゆるやかに結んでおくことも大切である。

それから寢具の保温も必要ではあるが餘り重からぬやうに心がけ安臥中に蚊や蠅の襲來を防ぐと共に蚤にも注意ねばならぬ。

特に生兒を寢させるといふことについて注意をせねばならぬのは寢させんが爲めに殊更ら生兒の体に動搖を與ねることである、之れは自然的に寢らすといふのでは無く、胸に疲勞を與ねて强制的に寢らすといふやうな結果となるのであるから延いて將來頭腦の發達を阻害せぬとも限らぬ、だから此點に於いて生後間も無き生兒を搖ぶつたり育兒上の思慮も無い子守女に背負はせたり乳母車に乘せるなどは甚だ心すべきことである。





## ◇……哺乳についての注意

胎内で胎兒を育てた母体は其の胎兒を分娩してからも哺育すべき自然の機能を備へておる、又た胎兒から首尾よく脫した生兒も引續き母の分泌液に哺まれてこそ健全に發育をすることが出來るのである。

そこで母体は今まで体内で胎兒に與ねておつた營養物は分娩後は乳房を通じて外面に分泌することゝなるのであるが夫れには自然の順序がある。

卽ち分娩が終れば母體も生兒も暫らく一睡をするが其の間に母體の乳房が次第に張り來つて初乳を分泌することゝなる、所が此の初乳を生兒に飲ますのは宜しく無いと云ふので夫れを棄てる代りにマクリ(五香とも云ふ)を與ねるのが一般的である、そして此のマクリによつて胎糞を下さしめ胎毒を除くのだと云ひ傳へておるが、その胎糞は必らずしもマクリの効果にのみよつて下るもので

は無く初乳を與ねても同樣である――と云ふよりも寧ろ初乳を與ねるのが自然であり又た効果が多いのである、つまりマクリは諸種の藥草を調合した云はゞ煎藥であつて夫れを與ねることにより通痢を催さしめると云ふものゝ生れたての嬰兒に殊更ら藥物を與ねずとも初乳も亦た適度の通痢を催さしめる効果があり、それによつて胎糞を下すことになるのであるから初乳は生兒に飲ましむべきものであると共にマクリは害があつても決して益の無いものであることを云ふておく。

又た或は初乳は多く出るものでは無く、且つ分娩以來一兩日の間は母乳も多く出るものでは無く生兒は空腹を感じて泣くから母乳が完全に出るまでのツナギにマクリを與ねるのであると云ふもゝあるが特に乳不足の母體なれば兎に角最初に分泌の多く無いのは之れも自然の機能によることで云はゞ分娩後時間も經たぬ生兒に多量の乳を與ねることがよく無い結果、母乳の多く出ないのも





天與の調節を行はれておるものであると云へる、夫れのみか生兒は泣くことによつて肺をひろめ、呼吸を深くして發育上に効果のあるものであるから少しも懸念をするに足らぬのである、從つて「泣くからお腹が空いたのだらふ、乳が出ねばマクリを飲ませ、それ砂糖湯を拵へてやるがよからふ」などと與ねるのは結局可愛さが變じて障害を起さしめるものであることを思はねばなるまい。

## ◇……母乳と人工營養

如上の通りであるから生兒には自然に分泌する母乳を與ねることが最もよいのであるが中には乳不足の爲め……已を得ぬにしても「子供に乳を與ねると自分の容色が衰へるから」といふやうなことで乳母を雇ふたり人工營養を用ひるやうな不心得な婦人も無いでは無いが生兒の發育上から云へば母乳ほどよいものは無いのである。

尤も母乳の代りに乳母の乳汁を與ゐることは母乳とその營養價に變りは無いやうに思はれるが、母の體質と乳母の體質が同一で無い限り其の分泌する乳汁が生兒の體質に適合するか否やと思はねばなるまい況して母乳は母體の微妙な作用によつて生兒の生長に伴ひ漸次に濃度を加へるものであるから分娩時の同からぬ乳母の乳汁を以て生兒の胃腸に障害を及ぼさず完全に發育せしめ得るとは斷じて云ひ得ないことになる。

乳母の乳汁ですら左樣に心せねばならぬとすると、夫れ以外の人工營養に至つては尙更らであるのは當然と云はねばなるまい、母乳の代用に牛乳がよい、山羊の乳はよい、ミルクを用ふべきである、等、等、幾多の代用品を傳へられておる、又た事實に於いて進歩し〻哺育法により夫れを適度に用ひたならば或は完全に目的を達し得られるかも知れないが、その適度と云ふことが中々困難である、現在母乳の代用として用ひられておる人工營養は牛乳か若くは牛乳を





原料としたミルクであるが、その牛乳と人乳と比較してみると次ぎのやうな差がある。

| | 蛋白質 | 脂肪 | 糖分 | 灰分 |
|---|---|---|---|---|
| 牛乳 | 三、〇 | 三、五 | 四、五 | 〇、七 |
| 人乳 | 一、〇 | 三、五 | 六、七 | 〇、二 |

之れによると牛乳は人乳に比して蛋白質が一に對する三、卽ち三倍多量に含んでおる代りに糖分に於いて二、二少く、灰分に於いて〇、五多いといふことになる、處が蛋白質が多量にあると虛弱な生兒の胃で消化することが出來ないから薄めねばならぬが、蛋白質を適度に薄めんが爲めに三倍の水を加へたならば蛋白質は夫れによつて適度になつたところで之れも營養上必要な脂肪や糖分や灰分が非常に不足を告げること〻なる、それのみか牛乳は消毒せねばならぬそして其の消毒法としては煮沸するのを常とするがその結果灰分は沈澱し、そ

れがために胃中に入つて消化が完全に行はれず、爲めに消化不良や胃腸の障害を起すことゝなる。

以上のやうな譯であるから母體が健全なれば其の母乳を與ゐるに限るが、しかし又た母乳を與ゐて反つて宜しく無い場合が無いでは無い、それは外では無いが母體に特別の事情がある場合である、卽ちそのことは項を更めて次ぎに述べやう。

## ◇……母乳を與へ難き場合

生兒に母乳が最も適するとは云へ夫れは健全な母體から分泌する母乳であつて不健全な母體から出る母乳は忽ち生兒に惡影響を來すは云ふまでも無い、而己ならず假令母體は健全であつても其の食物の如何は必らず生兒に覿面に反響を見るものであるから下痢を催起し或は胃腸を損ふやうな性質の食物は母體が





如何に咀嚼するにしても愼しまねばならぬ程である、況して母體に疾病等ある場合には(勿論病質にもよるが)醫者の意見を聞いて絕對に飲ますことを控へねばならぬ、其の內にも

一、結核性の疾病、心臟病、脚氣病のあるもの

二、發熱の甚だしき時

三、精神病或は遺傳性の疾患あるもの

其の他乳の出でがたいもの等は己を得ず乳母を以てするか或は人工營養によらねばなるまい。

尤も乳の出ないものと云ふ內にも分泌腺障害等の爲めに出がたいものは乳もみ或は其の他の手術によつて治癒することが出來る、又た分泌が相應にあつても乳の質のよろしからざるものも偶には無いでも無いが、それには何等かの疾患がある結果によるもので健全な母體にして乳の質が不良といふやうなものは

殆んど稀有である。

## ◇……乳母の選任

母乳の代りに乳母を雇ふ場合には其の選定に注意をせねばならる、卽ち完全な乳母としては左の條件に匹適するものを選ぶべきである。

一、血色よく身體の健全なるもの

二、黴毒、結核、腺病、皮膚病、諸種の皮膚病の無きもの、若くは其の當時に無くとも嘗てさうした疾病に冒されたことの無いもの

三、乳房の發育のよきもの、そして出來得べくんば其乳質の良否を見わけた上で選任すれば一層安全である

四、年齢は母體の年と大差無きものをよしとするが夫れでも最高三十二三歳以下のものとすべきである





五、乳母たるべき婦人が子を產んだ日時と母體の分娩した夫れと大差なきを宜しとするが若し夫れで無くては多くも六七週間以內の差で分娩後四週間を經たるものを可とする

以上は體質或は生理上から見た理想の乳母であるが、それ以外に乳母の性質或は言行についても調査を忽せに出來ぬのは云ふまでもない。

## ◇……人工營養

適當の乳母を得がたい時には乳母の代りに人工營養を以てせねばならぬ、そして、其の人工營養として普通一般に用ひられておるものは牛乳か若くはコンデンスミルクである。

所が牛乳には前に述べたやうな人乳との差があるから蛋白質の多量に對して約三倍に水或は湯を以て薄め、糖分の補足としては上等の砂糖を適度に混じて

母乳に近き成分たらしめ且つ適當の温度に暖めて與へねばならぬ。

然も牛乳は搾取場で消毒したものを配達するのが普通ではあるが夫れだけでは充分に安心が出來かねるから更らに煮沸して用ひるのはよいとしても、其の煮沸用に鍋や行平などを使ふ時は直ちに煮立つて黴菌の絶滅しない内に火から下すことになる結果、肝腎の目的は達し得られないのみか再び繁殖し且つ鍋に入れたまゝ適當の温度に冷しておる内に外部から黴菌が侵入せないとも限らぬそこで完全な消毒法としては熱氣に堪ゐる壜（牛乳配達に用ひる壜なれば大抵差支へが無からふ）に入れたまゝ十分間ばかし湯焚にして煮沸するが宜しい。

尚牛乳の薄める度合及び與ゐる分量は生兒の生育につれて異にするが其の割合は次ぎの通りである。

| 生育期間 | 牛乳に對する水の加入率 | 一回の量 | 一日の分量 |
|---|---|---|---|
| 生後三週間 | 三　倍 | 五　勺 | 八回（四合） |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 二ヶ月まで | 二　倍 | 七勺半 | 八回（六合） |
| 四ヶ月まで | 一、五　倍 | 一　合 | 七回（七合） |
| 六ヶ月まで | 一　倍 | 一合三勺 | 六回（八合弱） |
| 八ヶ月まで | 〇、五　倍 | 一合二勺 | 六回（七合二勺） |

卽ち生後三週間の間は一合の牛乳に三倍である三合の水或は湯を加へて薄めた此の合計四合のものを一日八度に割つて與へるのであるから牛乳は一合で恰度よい譯であるが三週間以上六ヶ月の間は一合の牛乳に二倍、卽ち二合の水或は湯を加へて三合としたものと七勺半づゝ八回與へるのであるから此の一日に要する牛乳は二合無ければならぬ、又た二ヶ月以上、四ヶ月までは牛乳一合に對し水或は湯は一合五勺を加へたものを七回となると一日に三合弱の牛乳を要する……といつた割合である、斯くして漸次にその量を加へ八ヶ月以後は稀釋するまでも無く其のまゝの牛乳を與ゐてよいそれから稀釋した牛乳に適度の砂

糖を混じることは前にも述べておいたが、之れは加味する意味では無く糖分を補ふ爲めであるから是非忘れぬやうにすべきである。

次ぎにコンデンスミルクを用ひる場合――之れは其の種類によつて成分の多少の差はあるが然し小兒の哺育用として糖分も適當に含んであるから砂糖を混入するに及ばぬが然し生兒の發育に準じて稀釋をせねばならぬ、卽ち其割合は

| | | | |
|---|---|---|---|
| 二週間まで | ミルク一に對して | 水二四 |
| 一ヶ月まで | 同 | 同二三 |
| 二ヶ月まで | 同 | 同二一 |
| 三ヶ月まで | 同 | 同二一 |
| 四ヶ月まで | 同 | 同一九 |
| 五ヶ月まで | 同 | 同一八 |

五ヶ月以後は一ヶ月ごとに水の一倍を減じ滿一ヶ年後にはミルク一に對する





水一〇の割合を以てする。

## ◇……哺乳の時間

哺乳の時間を一定することも大切である、生兒が泣いたからといふて、乳房を啣ませ生兒を寢さすからと云ふて乳汁、又た起きたからと云ふて同じく乳と云つたやうに乳を與ゐることは最も愼まねばならぬ、それで母乳にしろ代用乳にしろ回數を定めて飲ましめ、夫れ以外には假令泣かふとも斷じて飲まさぬやうにせねばならぬ、又た生兒の泣くのは必らずしも空腹の場合と限つた譯ではなく眠いとき、醒めたとき、尿屎をして氣持のよく無いとき、痒いとき、痛みを感じるとき等によることもあるから其の原因も究めず泣くごとに哺乳をしておつては遂に胃腸を損ひ消化不良症を起して生成後にまでも悔を殘すやうなことになる。

それでは哺乳の回數を何れくらゐとすればよいか、それにはいろ〳〵と說が無いでも無いが最も適當と思はれるのは生後一ヶ月間くらゐまでは晝間は二時間に一回、夜間は三時間に一回くらゐの割合を以てし、一ヶ月後は漸次に時間を延長して晝間の二時間を二時間半から三時間に、夜間の三時間を三時間半から四時間と云つた工合にすべきである。

尙哺乳について最も注意すべきことは生兒の口中に喞ます乳房或は人工營養を飲ますに用ひる乳器は授乳前に脫脂綿或はガーゼに約五十倍に溶いた硼酸水を浸したもので拭ふこと、又た生兒の口中も時々輕く拭ふことを忘れてはならぬ。

授乳は一方の乳房にのみ偏せず左右交も與ゐることも大切である、それで無くては一方の分泌量が減少するやうなことになる。

添ひ寢をしたまゝで哺乳することは生兒の鼻口を壓して危險の伴ふものであ





るから絕對に避けねばならぬ、殊に夜間に哺乳をする場合は尙更らである。

## ◇……生兒の異狀

生兒は自分の意志を明瞭に傳へ得ないのは勿論であるから苦痛があつたり身體に異狀のあつたところで夫れを表白することが出來ぬ、それで保育するものが常に注意を怠らぬやうすべきは勿論である、其の點に於いて本稿の最初に述べた健康日誌を作製することも必要だが又た夫れと共に其の啼聲や糞便に注意することも大切である。

生兒の啼聲は、二日より三日、三日より四日と日の經つに從ひ保育者の耳に馴れるやうになるものであるから夫れを聞くによつて眠い爲めに啼くか空腹の爲めに啼くか但しは襁褓が濕つて氣持の惡いためかそれとも痒いとか痛いとか略ぼ判るものである、從つて其の原因を除きさへすれば喃きやむのを普通とす

るが如何にしても啼き續ける時或は其の啼聲が特に癇走つて聞ける時などは腹痛を覺ねるとか虫氣があるとかいふやうな異狀があるのであるから專門醫（小兒科）の診療をうけるが安全である。

それから糞便は分娩當時の胎糞は別として普通哺乳兒の排泄するものは鮮やかな黃色をした軟便で臭氣が無く又た牛乳を用ひておるものは灰色で稍臭氣がある、處が左のやうな徵候を來した塲合には油斷がなり難いから直ちに手當をせねばならぬ。

一、大便の量が減少し其の色が稍暗黃色を呈して粘り氣のあるやうに思はれる場合は――乳汁不足と見ねばならぬ

二、大便が綠色若くは暗褐色を帶した場合、それに泡や粘液等の雜る場合は消化不良等の爲め胃腸に障害を來したものと見ねばならぬ

三、大便とは異ふが身體を動かすと直ぐ乳を吐き出すことがある、之れは乳汁





を飲みすぎた場合に起る現象ではあるが屢々さうしたことが繰返すやうなことがあれは之又た胃に障害を來たしたものと見ねばならぬ

之れだけのことに注意し、其度ごとに手遲れにならぬやう手當てをすればよいとは云ふものゝ出來得べくんば哺乳をする母親が常に自らの食物にも注意しさうしたことの出來るまで夫れを未然に防ぐ心がけが無くてはなるまい。

## ◇……白粉と生兒

白粉は婦人に無くてはならぬ化粧品として誰れしも用ひるものでありますと共に夫れが生兒に何等の關係をもたぬものと今まで一般に思はれておつたが然も近年專門家の研究によつて夫れこそ生兒の一命をも奪ふ恐るべき危險物であることを是認されるに至つた。

姙娠中の婦人が白粉を常用すれば流產の恐れあるばかりか哺乳中の母親が白

粉を以て化粧料とするが爲めに生兒を殺し、生兒の汗疹どめとして白粉を塗沫することによつて同じく一命を失ふに至るといふのである、そして其の原因は云ふ迄も無く白粉中に含有した鉛毒が然らしめるのであるから鉛氣の含有しておらぬ白粉なれば危險は無い譯だが、サテ世上に無鉛白粉なる名目の下に發賣されておつても其の實質は果して無鉛であるか何うかは疑はしい、又た假りに偶ま無鉛無害の優秀品があるにした所で有鉛のものまでが販賣政策上から無鉛の名によつて賣られておらぬとも限らず、且つ有名な白粉であるから必らずしも無鉛といふことは出來ないとすると取捨撰別は甚だ困難である。

いや、白粉の撰別は何うでもよいとして、夫れが爲めに生兒に何んな結果を及ぼすかといふと彼の腦膜炎なる病症は夫れである。

腦膜炎の恐るべきことは今更ら茲に說くまでもあるまい、生兒の異狀を見て癇虫であるとか、何んとかと諸種の手當を加へる頃には既に遲い、その內にひ





きつけがくる、軈て極度のひきつけ狀態が昂上して遂に生命を奪つて仕舞ふ、然も其の期間は外面に異狀を認めてから最も早いもので一日も半日も待たぬものもある、又た幸ひに一命を取りとめた處で白痴となるか痴呆となるか其の何れにしても一人前の人間として健全なる發育は望むことが出來ない、であるから人として化粧もせねばなるまいが、愛兒の一命を賭してまでもおめかしをするにも及ぶまい。

況んや鉛毒は愛兒のみでは無く軈て自分の身にも及ぼすことを思ふたならば尙更らである。

筆を擱くに方りて――育兒法についてまだ〳〵述べたいことはあるが、本編豫定の紙數は之れを以てしても非常に超加することになつたから遺憾ながら之れくらゐで一先づ稿を閉じ、他日育兒法として更めて詳細に

述べることゝする。

# 優生兒調節と姙娠衛生（終）



昭和五年五月　十日印刷
昭和五年五月十五日發行

〔定價七拾錢〕

著作者　優生學研究會
大阪市南區高津町六番丁六番地
發行者　大川金四郎
大阪市西區阿波座上通三丁目三十九番地
印刷者　幸松一雄
大阪市西區阿波座上通三丁目三十九番地
印刷所　金星社印刷所

著作權所有

發兌元　大阪市南區高津六番丁六番地
金星社書店
電話戎四七四四番
振替大阪六〇九五二番

◈賣行愈々激增今や

家庭の必需品◈

# 現代新禮儀作法挨拶の言葉

工藤節子先生著

世間一般に禮儀作法と言へば堅苦しきものとのみ思ひ何となく實行出來ざる樣解し居らるゝも、本書に示すその一般を繙き知る時は容易に行はれ人中で恥をかき蔭で笑はるゝ等の憂なく、先生一流の通俗的に著述せられ日常の挨拶より儀式、出產、訪問、祝辭等を始めとし一般喜び事、悔み事及び社交應接の仕方より日々の心得等細事に到る迄委しく一々親切叮嚀に圖解を以て詳述し亦挨拶のみを附錄としあれば祝の言葉、悔みの言葉、日常一般の挨拶に行詰る時は卽座に見出す事の出來る良書にして本文は總振假名付製本体裁頗る美なれば机上を飾る唯一の秘書なり。

ボブリン上製
四六判箱入
全三百七十餘頁
定價壹圓五十錢
送料拾貳錢

終

¥70